

立木教夫先生への謝辞

外国語学部

宮下 和 大

立木教夫先生は、平成4年（1992）、麗澤大学国際経済学部にて助教授として着任された。現在の麗澤大学経済学部へとつながるこの「国際経済学部」は、ちょうどこの年に開設されているので、立木先生は経済学部のスタートから現在に至るまで教鞭を執られてきたことになる。私は立木先生の麗澤大学での講義を受けたことはなかったため、先日の最終講義（「現代科学思想B」）が初受講となったが、生命の起源について様々な仮説を紹介しながら丹念にその展開を辿り、ほぼ90分間を通常授業と同様に使った講義で終えられた。ホワイトボードには数式やグラフ、図表が描かれ、最後まで全くいつも通りに振る舞われるお姿に、立木先生らしさを感じさせられた一コマだった。

先生は国際基督教大学の自然科学科を卒業され、大学院は米国に留学し、理論物理学を専攻され、麗澤大学でも「現代科学思想」や「生命科学」などの科学系の授業を担当されてきた。先生の業績については一覧を参照いただきたいが、たとえば、立木先生が手がけたビーチャムとチルドレス著『生命医学倫理』（第5版）の邦文翻訳書は、生命医学倫理の現代的古典とも評される同書の本格的な紹介でもあり、多くの研究者が引用・参照する貴重書となった。2009年に出版された同書は早くも品切れとなり、中古品が高値で売買されるほどの好評を得ている。

立木先生と私の出会いは、平成8年（1996）に私が入塾したモラロジー専攻塾においてであった。そこでは「朝英語」という活動があり、立木先生はそれを中心となって担当・運営されてきた。この「朝英語」では、毎週月曜日から金曜日まで、毎朝7時半から9時までの1時間半、AFN（当時はFEN）のラジオの英語ニュースのディクテーションやさまざまな洋書の講読を行う。

2年間にわたって、ほぼ毎朝、立木先生のもとで英語を学ぶ機会をいただき、また2010年以降、麗澤大学で講義を持つようになってからも、十数年前と同様に朝英語に出席する許可をいただき、立木先生と様々な洋書を毎日少しずつ読んでいくという有り難い機会をいただいて今日に及ぶ。ジョシュア・グリーン

の *Moral Tribes* やベームの *Moral Origins*、ペーボの *Neanderthal Man* など、のちのち邦訳されて話題となったものも少なくない。最近ではマイケル・トマセロの *A Natural History of Human Morality* を読了したが、毎朝、知的な興奮をもって先生とお話する楽しい時間だった。これらはどれも現在の私自身の研究のバックボーンとして血肉化しているものでもある。

バラエティに富んだ洋書講読の中で深く印象に残っているのは、脳神経科医のオリヴァー・サックスの一連の書籍である。サックスの著述群には、病や障害の捉え方、人間存在の可能性に対する一貫した問いと態度がある。たとえば、「定義に凝り固まった「健常」を基準にせず、変化した特殊性質や必要に応じて新しい組織や秩序をつくりだす有機体の能力という面から、「健康」や「病気」という概念をとらえるべきではないか」とサックスは述べる（『火星の人類学者 ― 脳神経科医と7人の奇妙な患者』「はじめに」ハヤカワ文庫）。ここには自身が向かい合う存在に対する「冷静かつ温かい」まなざしがある。立木先生が学生たちに一貫して注いできたものもこれと同種のまなざしではないかと私は感じてきた。

私が20代の頃に一緒に学んでいた学生の中には、英語が苦手、英語が嫌いという者も少なくはなかった。そうなる寝坊をして遅刻する者や、理由をつけて休む者も出てくる。しかし、教える側である立木先生が遅刻をしたり、無断で欠席したりということは、私が記憶するかぎり、ただの一度もない。先生はやる気のない学生には厳しかった。しかし、それはどこまでも「やる気」が基準なのであって、たとえどれだけ英語が苦手な学生であっても、やる気のある学生には実に懇切なご指導をしてくださった。

私にとって、この「朝英語」は、この活動を地道に継続している立木先生の気持ちと言葉と行動から、英語を学ぶ以上のものを学ばせていただいた場であった。立木先生は多くの業務をかかえ、ご多忙ななかにあっても、この朝英語を数十年にわたって続けられて現在に至っている。その長年にわたる先生のお姿に、私は心からありがたさを感じずにいられない。時折、先生にそのことをお話しすると、先生は決まって「そんなことはあまり気にしないでください。私も自分のために英語を学んでいるのですから」とおっしゃられる。先生から学ぶべきことはまだまだ多い。

大学院進学後も、時折、こちら（麗澤大学）に来た時には立木先生の研究室にお邪魔して、色々なお話を聞かせていただいた。話はいつも広い分野に及ぶが、先生は常に何冊もの研究書を同時に読み進めていて、本を手に取りながら「こういう面白い本があるよ」「こういう新しい研究があるよ」と目を輝かせてお話しくださる。和書・洋書を問わず、お手製のブックカバーで覆われ、ページには大きめの付箋紙が貼られ、実に細かい字で書き込みがある。コピーをいただきながら、気づくと何時間も話し込んでいたりしたことがある。

突然押しかけてきてさぞご迷惑をおかけしたのではないかと今では思うが、それが麗澤大学に来たときの私の楽しみの一つでもあった。

先日の最終講義の後も、駆けつけたゼミの卒業生たちを研究室に招いてお話しをされていた。きっと私だけでなく、多くの学生や若手研究員たちが、研究室B棟4階のあの研究室でさまざまな話をし、励まされてきたに違いない。時折、先生はゼミ生の思い出を語ってくださったが、実に様々な学生がいて、先生はそれを楽しそうにお話しになる。先生は学生たちのそれぞれの事情をよく把握していらっしゃる。先生から聞き出すというより、学生たちのほうから思わず先生に語ってしまう。先生は学生たちの言葉に共感しながら、いつも励まし、その後を見守ってこられたのだと、話を伺っているとよくわかる。

先生のご退職の節目にあたり、先生が現在抱いておられる様々な研究がますます進展し、そのお話しをお聞きする機会がいつそう増えていくことを期待しつつ、改めて先生に感謝の意を表したい。立木先生、どうもありがとうございました。



立木教夫教授 略歴

昭和22（1947）年7月6日生まれ。

学 歴

昭和47（1972）年3月 国際基督教大学教養学部自然科学科卒業（教養学士）
昭和49（1974）年6月 米国オハイオ州立ケンタッキー大学大学院博士課程理論物理学
専攻中退（MA）

職 歴

昭和51（1976）年4月～昭和63（1988）年3月 財団法人モラロジー研究所研究部基礎理論研究室研究員
昭和59（1984）年4月～平成4（1992）年3月 早稲田大学社会科学研究所特別研究員
昭和62（1987）年4月～平成11（1999）年3月 早稲田大学社会学部非常勤講師
昭和63（1988）年4月～平成13（2001）年3月 財団法人モラロジー研究所研究センター
廣池千九郎研究室研究員
平成4（1992）年4月～平成8（1996）年3月 麗澤大学国際経済学部助教授
平成8（1996）年4月～平成11（1999）年3月 麗澤大学国際経済学部教授
平成11（1999）年4月～平成20（2008）年3月 麗澤大学国際経済学部国際産業情報学科
教授
平成13（2001）年4月～平成25（2013）年3月 財団法人モラロジー研究所研究センター
生命環境研究室室長・教授
平成13（2001）年4月～平成25（2013）年3月 財団法人モラロジー研究所研究センター
廣池千九郎研究室教授
平成18（2006）年4月～平成25（2013）年3月 麗澤大学比較文明文化研究センター副セ
ンター長
平成20（2008）年4月～平成25（2013）年3月 麗澤大学経済学部教授
平成22（2010）年3月～平成25（2013）年3月 公益財団法人モラロジー研究所理事
平成22（2010）年4月～平成25（2013）年3月 公益財団法人モラロジー研究所研究セン

ター長・教授

平成25（2013）年4月～平成30（2018）年3月 麗澤大学経済学部特任教授

平成25（2013）年4月～平成29（2017）年3月 麗澤大学比較文明文化研究センター長

平成25（2013）年4月～現在 公益財団法人モラロジー研究所研究センター生命環境研究室客員教授

平成25（2013）年4月～現在 公益財団法人モラロジー研究所研究センター廣池千九郎研究室客員教授

立木教夫教授 主要業績

著書（単著・共著）

- 立木教夫著『心-脳研究とモラルサイエンス』麗澤大学出版会、2018年。
- 立木教夫著『「広池千九郎の道徳体験 —『道徳科学の論文』の執筆決定をめぐる伝記的研究』公益財団法人モラロジー研究所、2011年。
- 立木教夫著『現代科学のコスモロジー — 人間のための物質・生命・情報論』成文堂、1992年。
- 大場裕之・立木教夫・目黒昭一郎+「共創空間」開発プロジェクトチーム著『心を持つロボットと介護 —「共創空間」で気づく介護：自分・ロボットとのかかわり』Working Paper No. 73, RIPESS 麗澤大学経済社会総合研究センター、2016年。「AI ロボット最前線」を収録。
- 大場裕之+「共創空間」開発プロジェクトチーム著『共創空間開発学のすすめ — 知のイノベーションの新技法』麗澤大学出版会、2015年。「ロボットに心は必要か — 脳と心とロボットをめぐる科学技術倫理」を収録。
- 麗澤大学経済学部国際社会・国際教養研究グループ著『国際社会を読み解く教養』麗澤大学経済学部、2011年。「心-脳-社会システムとミラーニューロン」を収録。
- 岩佐信道・北川治男監修『2009年モラルサイエンス国際会議報告書 廣池千九郎の思想と業績 モラロジーへの世界の評価』公益財団法人モラロジー研究所、2011年。「広池千九郎の道徳体験 —『道徳科学の論文』の執筆決定をめぐる伝記的研究」を収録。
- モラロジー研究所出版部編『廣池千九郎の行迹77篇』財団法人モラロジー研究所、2006年。「『史学普及雑誌』の発行」、「矢納幸吉会長と廣池千九郎博士」、「中山真之亮管長と廣池千九郎博士」、「『道徳科学の論文』の英訳計画」、「豊田村・永盛村での人心開発」を収録。
- モラロジー研究所道徳科学研究センター編『2002年モラルサイエンス国際会議 グローバル時代のコモンモラルティの探求』財団法人モラロジー研究所道徳科学研究センター、2005年。「廣池千九郎の道徳体験 — 四つの自己反省の事蹟を通して探る」を収録。
- 大澤俊夫先生傘寿記念文集刊行委員会編『大澤俊夫先生傘寿記念文集』大澤俊夫先生傘寿記念文集刊行委員会、2005年。「大澤俊夫先生との出会い」を収録。
- Edited and Translated by Haruo Kitagawa, Shujiro Mizuno, Peter Ruff, *Searching for a Common Morality in the Global Age: The International Conference on Moral Science in 2002*, Published by Lancer's Books, New Delhi, in Association with The Institute of Moralogy, Kashiwa-shi, Japan, 2004. "Chikuro Hiroike's Moral Experience: How did he realize the spirit of 'Benevolence, Tolerance and Self-Examination'?" を収録。

- 伊東俊太郎・広重徹・村上陽一郎共著『[改訂新版] 思想史のなかの科学』平凡社ライブラリー1400、平凡社、2002年。「アディショナルノート — 1975年から2002年に至る科学の進展を概観して」を収録。
- 川窪啓資・立木教夫・保坂俊司編集『伊東俊太郎博士古稀記念文集』2000年。「伊東俊太郎先生との出会い」を収録。
- 伊東俊太郎・広重徹・村上陽一郎共著『改訂新版 思想史のなかの科学』財団法人広池学園出版部、1996年。「アディショナルノート — 1975年から1995年に至る科学の進展を概観して」を収録。
- 『高度情報化社会の研究序説』（社研研究シリーズ19号）、早稲田大学社会科学研究所、1985年。「ライフサイエンス・情報・価値判断 — 「内なる情報」の操作の問題を中心として」を収録。
- モラロジー研究所編『日本の近代化と精神的伝統』廣池学園出版部、1985年。「竹崎順子 — 慈母性の教育者」を収録。
- モラロジー研究所編『道徳・教育・経済』廣池学園出版部、1983年。「人間の生命をめぐる倫理的状況 — 生命科学と治療、人権さらに救済の問題について」を収録。

翻訳書

- クリスチャン・キーザーズ著、立木教夫・望月文明共訳『共感脳』麗澤大学出版会、2016年。
- ヤン・フェアブレツェ、イエレ・デ・シユリーファー、スヴェン・ヴァネツツェ、ヨハン・ブレックマン編、立木教夫・望月文明監訳『モラルブレイン — 脳科学と進化科学の出会いが拓く道徳脳研究』麗澤大学出版会、2013年。
- ジェローム・バンデ編、服部英二・立木教夫監訳『地球との和解 — 人類と地球にはどんな未来があるか』麗澤大学出版会、2009年。
- トム・L・ビーチャム、ジェイムズ・F・チルドレス共著、立木教夫・足立智孝監訳『生命医学倫理』[第5版] 麗澤大学出版会、2009年。
- ジョン・グリビン著、立木教夫訳『宇宙進化論』麗澤大学出版会、2000年。
- トム・L・ビーチャム著、立木教夫・永安幸正監訳『生命医学倫理のフロンティア』行人社、1999年。
- トム・L・ビーチャム、ジェイムズ・F・チルドレス共著、永安幸正・立木教夫監訳『生命医学倫理』[第3版] 成文堂、1997年。
- トム・ストウニア著、立木教夫訳『情報物理学の探求 — 情報と宇宙の内的構造』シュプリンガー・フェアラーク東京、1992年。
- 服部英二監修『文化の多様性と通底の価値 — 聖俗の拮抗をめぐる東西対話』麗澤大学出版会、2007年。ヘンリー・P・スタップ「道徳理論の一基盤としての科学的人間概念」(翻訳)を翻訳・収録。
- 服部英二監修『ユネスコ・国連大学シンポジウム 科学と文化の対話 — 知の収斂』麗澤大学出版会、1999年。カール・H・プリブラム「量子情報処理から見た脳と心」、ヘンリー・P・スタップ「価値と量子論的人間観」を翻訳・収録。
- モラロジー研究所編『廣池千九郎没後五十年記念論集 廣池千九郎とモラロジー』財団法人広池学園出版部、1989年。ロバート・ボール「モラロジーとイギリスの衡

平法体系」を翻訳・収録。

論文・論考

科学関係

- 「心を持つロボット」の出現とその社会的インパクト」、大場裕之・山下美樹・露木かおり＋「共創空間」開発プロジェクトチーム著『グローバル社会の中での自分らしさと男女協働：「共創空間」で気づく個性の本質』Working Paper No. 77, RIPESS 麗澤大学経済社会総合研究センター、2017年。
- 「ミラーニューロン・共感・利他」『モラロジー研究』No. 78、2016年。
- 「認知神経科学と進化生物学の出会いが拓く道徳の科学的研究」『モラロジー研究』No. 71、2013年。
- 「心-脳-社会システムとミラーニューロン」『地球システム・倫理学会会報』No. 5、2010年。
- 「現代人の基礎教養としての生命科学」『麗澤教育』No. 11、麗澤大学、2005年。
- 「脳のイメージング研究の進歩と倫理的対応」『比較文明研究』第10号、麗澤大学比較文明文化研究センター、2005年。
- 「科学と価値 — 生命を媒介として」『比較文明』第12号、刀水書房、1996年。
- 「生命倫理」『季刊モラロジー生涯学習』第138号、1996年。
- 「現代宇宙論(1)：宇宙起源論」『麗澤学際ジャーナル』第3巻第2号、1995年。
- 「生命・情報・倫理 — 生命科学から見た人間問題」『麗澤学際ジャーナル』第1巻第1号、1995年。
- 「生命科学の進歩と優生思想の変遷 — ダニエル・J・ケヴルズ著『優生学の名のもとに』を中心として」『モラロジー研究』No. 39、1994年。
- T・L・ビーチャム「倫理理論とバイオエシックス(二)」(翻訳)『麗澤学際ジャーナル』第1巻第2号、1993年。
- 「広池千九郎の遺伝学受容に関する一考察 — なぜ広池は遺伝学に注目したのか」『モラロジー研究』No. 38、1993年。
- T・L・ビーチャム「倫理理論とバイオエシックス(一)」(翻訳)『麗澤学際ジャーナル』第1巻第1号、1993年。
- 「ヒト・ゲノム・プロジェクト — ジョエル・デイヴィス著『遺伝子暗号地図の作製』に近未来世界の課題を探る」『モラロジー研究』No. 35、1992年。
- 「科学技術と倫理の接点 — バイオテクノロジーの到達点と展望」『モラロジー研究』No. 34、1991年。
- 「情報物理学の探究 — トム・ストウニアの情報の物理的定式化を中心として」『早稲田大学情報科学研究教育センター紀要』Vol. 13、早稲田大学情報科学研究教育センター、1991年。
- 「情報と現代科学 — 情報概念の展開とその意義」『モラロジー研究』No. 32、1991年。
- 「アメリカの生命倫理学における「徳」をめぐる議論の復活 — T・L・ビーチャム、J・F・チルドレスの議論を中心として」『社会科学討究』第105号、早稲田大学社会科学研究所、1990年。
- 「生命起源論 — フリーマン・J・ダイソンの理論を中心として」『モラロジー研究』

- No. 31、1990年。
- 「宇宙論物語 — S・W・ホーキング著『時の小史』への招待」『モラロジー研究』
No. 28、1989年。
- 「「情報」概念の導入と科学の自己変容 — 意味論的・作用論的情報を中心として」
『社会科学討究』第99号、早稲田大学社会科学研究所、1988年。
- 「現代「心-脳理論」の鍵概念である「創発」をめぐる一考察」『モラロジー研究』
No. 24、1988年。
- 「現代の「心-脳理論」と情報 — ジョン・C・エクルズの心身相互作用論を中心と
して」『社会科学討究』第96号、早稲田大学社会科学研究所、1987年。
- 「人間・精神・情報の新科学観 — ロジャー・スペリーのメンタリズムをめぐる」
『社会科学討究』第93号、早稲田大学社会科学研究所、1986年。
- ウォルター・タップズ「心身医学革命 — 個人的意味および専門的意味について」
(翻訳)『モラロジー研究』No. 21、1986年。」
- 「生殖技術の進歩と倫理的インパクト」『モラロジー研究』No. 18、1985年。
- ウォルター・タップズ「道徳の神経心理学的・哲学的考察」(翻訳)『モラロジー研
究』No. 14、1983年。
- 「生命・技術・倫理」『<デルボラフ教授を囲む公開研究会>人間と技術とモラル』
(研究ノート No. 144) モラロジー研究所研究部、1983年。
- 「生命操作と人権」『モラロジー研究』No. 12、1982年。

人間学関係

- 「廣池千九郎がモラロジーで立証しようとしたことと現代科学」『麗澤大学紀要』第
100巻、2017年。
- 「廣池千九郎、実験心理学を学ぶ — 元良勇次郎、松本亦太郎に連なる心理学者たち
との交流」『モラロジー研究』No. 72、2014年。
- “Chikuro Hiroike’s Moral Experience: A Biographical Study of Hiroike’s Determina-
tion to Leave Behind Him A *Treatise on Moral Science*” 『モラロジー研究』
No. 69、2012年。
- 「廣池千九郎と天理教本島支教会(5)」『モラロジー研究』No. 68、2011年。
- 「廣池千九郎と天理教本島支教会(4)」『モラロジー研究』No. 67、2011年。
- 「廣池千九郎記念文庫 — 洋書」(廣池千九郎記念館だより16)『モラロジー研究所所
報』モラロジー研究所、2009年。
- 「「倫理」「道徳」という言葉の由来について」(現代の倫理道徳 Q&A, No. 75)
http://rc.morality.jp/qa/2007_75.html, 2007/04
- 「廣池千九郎と天理教本島支教会(3)」『モラロジー研究』No. 59、2007年。
- 「廣池千九郎と天理教本島支教会(2)」『モラロジー研究』No. 58、2006年。
- 「廣池千九郎と天理教本島支教会(1)」『モラロジー研究』No. 56、2005年。
- 「「知識」と「信仰」をいかに調和させるか — 明治四十四年における天理教教理研究
に基づく実地教育の事蹟」『モラロジー研究』No. 47、2000年。
- 「廣池千九郎博士の道徳思想の形 — 「自然の法則」という言葉の比較構造分析を通し
て」『モラロジー研究』No. 46、1999年。

- 「「信じること」と「探求すること」」『経営と道徳』No. 165、モラロジー研究所、1998年。
- 「廣池千九郎博士がとらえた「自然の法則」——「自然」と「道徳」はいかにかかわっているか」『比較文明研究』第1号、麗澤大学比較文明研究センター、1996年。
- 「廣池千九郎博士と矢納幸吉会長——出会いの前後の事蹟とその意義について」『モラロジー研究』No. 40、1994年。
- 「身体の東洋的意味論(下)——二宮尊徳の哲学を中心として」『かいびゃく』第39巻第12号通巻460号、一円融合会、1990年。
- 「身体の東洋的意味論(上)——二宮尊徳の哲学を中心として」『かいびゃく』第39巻第11号通巻459号、一円融合会、1990年。
- 「人間学研究事始——二宮尊徳研究会から学んだこと」『モラロジー研究』No. 29、1990年。
- 「身体の東洋的意味論——二宮尊徳の哲学を中心として」『社会科学討究』第102号、早稲田大学社会科学研究所、1989年。
- 「廣池千九郎の「精神作用論」に関する一考察——現代の「心-身・心-脳理論」との関係において」『モラロジー研究』No. 27、1988年。
- ロバート・ボール「モラロジーとイギリスの衡平法体系」(翻訳)『モラロジー研究』No. 26、1988年。
- 「二宮尊徳と富田高慶」『モラロジー社会教育資料』第102号、広池学園出版部、1987年。

その他

書評

- 「伊東俊太郎著『変容の時代』」『モラロジー研究』No. 75、2015年。
- 「Christopher Boehm, *Moral Origins: The Evolution of Virtue, Altruism, and Shame*」『比較文明研究』第19号、2014年。
- 「下程勇吉博士の後期教育人間学的著作の紹介」[共著]『モラロジー研究』No. 73、2014年。
- 「私が薦める麗澤大学出版会の本『伊東俊太郎著作集 第11巻 対談・エッセー・著作目録』」『大学出版』No. 93、2013年。
- 「日本地質学会監修、地学読本刊行小委員会編集『地学は何ができるか——宇宙と地球のミラクル物語』愛智出版、2009年」『地球システム・倫理学会会報』No. 6、2011年。
- 「服部英二著『文明間の対話』麗澤大学出版会、2003年」『比較文明研究』第9号、麗澤大学比較文明文化研究センター、2004年。
- 「伊東俊太郎著『文明と自然——対立から統合まで』刀水書房、2002年」『比較文明研究』第8号、麗澤大学比較文明文化研究センター、2003年。
- 「伊東俊太郎著『日本の科学と文明——縄文から現代まで』同成社、2000年」『比較文明研究』第6号、麗澤大学比較文明文化研究センター、2001年。
- 「高瀬浄『近代産業文明の構造と変容——脱近代のすすめ』」『比較文明』第16号、刀水書房、2000年。

- 「伊東俊太郎著『＜一語の辞典＞自然』三省堂、1999年」『比較文明研究』第5号、麗澤大学比較文明研究センター、2000年。
- 「米山俊直・吉澤五郎共編著『比較文明の社会学——新しい知の枠組』放送大学教育振興会、1997年」『比較文明研究』第4号、麗澤大学比較文明研究センター、1999年。
- 「北澤方邦著『近代科学の終焉』」『比較文明』第14号、刀水書房、1998年。
- 「伊東俊太郎編『比較文明学を学ぶ人のために』世界思想社、1997年」『比較文明研究』（第3号、麗澤大学比較文明研究センター、1998年。
- 「梅原猛編『講座 文明と環境 第15巻 新たな文明の創造』朝倉書店、1996年」『比較文明研究』第2号、麗澤大学比較文明研究センター、1997年。
- 「伊東俊太郎・安田喜憲編『文明と環境』日本学術振興会、1995年」『比較文明研究』第1号、麗澤大学比較文明研究センター、1996年。

謝辞・追悼文・その他

- 「永安幸正先生の思い出」『モラロジー研究』No. 63、2009年。
- 「下程勇吉著『廣池千九郎の人間学的研究』刊行に込められた大澤俊夫先生の感謝と報恩の心」『モラロジー研究』No. 62、2008年。
- 「大島末男先生への謝辞」『麗澤学際ジャーナル』第15巻第1号、2007年。
- 「私のゼミ生時代」『RU-Times』麗澤大学学生会、2001年。

